報告

IATSSシンポジウム1989
『世界都市・東京の変貌』報告

IATSS SYMPOSIUM 1989
"Tokyo Changing into World City" Report

後藤和彦*

Kazuhiko GOTO*

IATSSの主催で1989年5月10日～11日、東京、品川のコクヨホールで開かれたシンポジウムでは、学際性を特色とする学会として取上げるに相応しい東京問題をテーマとして、いまや世界都市として変貌しつつある東京の過去、現在、未来について多角的な議論が展開された。江戸からの歴史は今日なお深く首都・東京に影響しており、その上にグローバルセンター、世界都市としての新しい機能が重ねられつつある。そこから複雑、多様な問題が噴出している。その解決の方策はさまざまに提案されているが、国民、都住民の合意の形成には相当の困難があり時間を必要とすることと考えられる。

1．はじめに

東京を議論するのが一種の流行であるかのようにここ数年、あちこちで盛んに東京論が展開されている。本学会までが、といわれるかもしれないが、この点については、八十島会長が今回のシンポジウムの挨拶で述べられたように、学際的に人間と社会の全体像を常に展望しながら、交通の問題を考えてきた本学会としては自然な展開といっていい。交通の問題は、その交通の場となる都市あるいは都市間の問題の上に位置づけられなければならないし、現代都市の問題としてわれわれに最も切実なものは東京問題なのである。首都としての東京に世界都市としての東京という機能が重なり、しかもその過程が急速度に展開している。歴史的にも同時代的にも、これほど課題性、問題性に富んだ事例はないといえるのではないだろうか。

「世界都市」ということばはPeter Hallの著書のタイトル(1984)であり今年3月に刊行されたNIRA（総合研究開発機構）の『世界都市東京の創造』から孫引きすれば、Patrick Geddesが1915年に「世界の中枢的業務が過度に集中し展開されている偉大な都市のことを世界都市と命名した」という。ただ集中化が展開しているということだけではなく、その集中が長期にわたり展開し、国際的な経済力が持続しているところに今日の世界都市の重要性があるといえよう。今回のシンポジウムのタイトルにこのことばがつかわれたのもそうした意味からである。シンポジウムの中では世界都市ということばに並んでグローバル・センター、グローバル・シティというタームも盛んに使われた。近年の国際金融の国際化がグローバルな規模での情報・通信網の急速な発達で促進され、トウキョウ、ニューヨーク、ロンドンという三つの極がグローバルなセンターとしての機能を顕在化させてきたためである。

＊常磐大学人間科学部教授
国際交通安全学会顧問
Professor, Faculty of Human Sciences,
Tokiwa University
Councellor, IATSS
原稿受理　1989年7月18日

世界都市であれグローバル・センターであれ東京が提示する問題は実に多様であり複雑である。どれほど議論が繰返され積重ねられても、まだまだ問題の全貌が描き尽くされたとはいえないし、ましてや問題解決の方向、方策についての合意にいたるには程遠いのが現状である。今回のシンポジウムも、これだけですべてを尽くしたとはいえないだろう。しかし、かなりの展望はえられたという実感をもっている。ここでは二日間のシンポジウムに参加した一人として、いくらかは個人的な観点からのリポートになることを予めお断りして、大まかなまとめを試みることにしたい。

2．歴史　生きている過去

「都市計画といっても過去の力が大きい。急に変わることはない。既存の力と新しい力の合成」(藤森照信) であり、「生きられた都市」(陣内秀信) であるという観点をもって東京をみると、Fig. 1のようになりそうである。これは第1セッションの議論を図にしてみたものである。東京の問題の一つとみるひともいるのは確かだが、東京のもっている複雑な魅力のひとつは、「東京のうしろにあるもの。見える部分のうしろの見えない部分」(石井威望) でありそれは図にあるように明治以前のプレ近代の都市構造が完全に消滅してはいなくて、さまざまなかたちで残り、ひとびとが受継いできた生き方、「生きられた都市」として共存しているためである。都市のつくり方としても江戸の遺産に乗っかって表層的な手当をやり続けてきたのであり、江戸の都市構造が下敷きになり、その上に明治の計画と施設、そして昭和の復興がある、という重層構造になっている。これは計画側としては不十分であり、条件さえ揃えば完全に計画された都市が出来たのに、ということであろう。結果として過去がさまざまなかたちで生きて残っている、別の言い方をすれば雑多な都市になっているのである。

計画としては永年、都市計画とは道路づくり、ということが普通になっていた。その道路のパターンが江戸そのままというところは前述のとおりだが、都市中心部分に宅地形成することは早くからほとんど諦められ、もっぱら郊外にそれを依存するというかたちがとられてきた。高度経済成長後、ようやく計画の基本概念に「住まい」「公園」が登場するかと思われていたのに、表に大きく出てきたのは「オフィス」なのである。

大きく括ってみると、江戸以来の構造の重層性の上につぎつぎに都市の骨格である道路づくりがすすめられ、その上に都市機能と首都機能の拡大、集中が継続的に今日まで進行して、トウキョウ・プロブレムと一口にいわれる多様、複雑な問題群が一見、解決不能なようにまで見える状況に至った、ということである。しかし、こうした問題の基本にあると思われる重層性のなかに、むしろ今後の東京の展開のための契機がある、という考え方もありそうである。

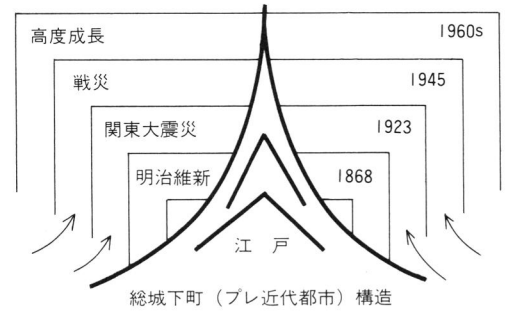

Fig. 1　東京の都市構造の多層性

それにしてもここ数年、普通の市民、住民が自分の住んでいる都市、町、地域に対して、「生きるひと」「住まうひと」として、これほどに目をむけてきているのは何故なのだろうか。自分が住んでいるところに特に問題がないのであれば、これほどまでに関心が高まることはないだろう。やはりこれは、そこに住み、生きる人間の立場からみて、問題があり、不都合があるからだと思うのが自然だろう。生きるということはもっと素晴らしいことであるはずなのに、なにか他のことのために、自分達の生活をフルに生きることが妨げられている、ということを感じているからこそ、学者にばかりことを任せないで自分達の目で、自分の住まう都市を、町を、地域をウオッチングしようということになっているのだと考えたい。

もちろんこうしたことは高度経済成長を成し遂げてきたからこそ出てきた、という側面を見逃してはならない。従ってこれはアメリカの歴史学者D. ブーアスティンがよくいうように、失敗の故にではなく、成功の故にこそ生じた新しい問題群としてみるべきものだろう。グローバル・センターの一つとして国際金融の世界に重要な機能を果たすに及んで、単に経済的だけではなく、国際政治的にも重要な地位を占めるようになってきたために、首都としての東京

の問題に重なって、新たな問題群が登場して来たのである。まさに成功故の問題の発生というべき状況なのである。

3．現況　光も影も

現況を扱ったのはシンポジウムの第2、第3セッションであった。簡単にいえば第2のセッションは東京の魅力、光を扱い、第3では東京が抱えている危機、影をテーマとした。もっとも東京問題は、そもそもが「問題」として提起され続けているために問題として議論することには、そして殊に東京で議論することには、いささかの抵抗、あるいは居心地の悪さを論者は感じているように思われる。問題、問題というけれど、そのことこそ東京の魅力になっている、欧米を基準に善し悪しを言い立てるのはそろそろ止めてもらいたい、といった、いささか情緒的な反応が内側にありそうである。

東京がなぜ巨大化するのか。その理由のひとつは明らかに東京にはひとを、殊に若い人々を惹き付ける魅力があるからである。巨大化し、集積が進めば進むほど、そこにはより多くの人々にとっての機会が存在する。単に職が得られるということだけではない。若い人達にとって欠かせない絶えざる変化というものが東京にはふんだんにある。「絶えず変貌し続ける」（八十島会長）ところに東京が広く人々を惹き付ける要因がある。しかも東京は前述のように都市形成の歴史の特性上、過去との重層性が強く、そのことが東京に奥行きを与え魅力を添えている。過去との重層性はある場合には旧と新との極端なコントラストとして見えるが、そこには欧米には見られないエネルギーが潜んでいるのである。それは一種の「バイオ的システム」であり「アジア的カオス」（石井威望）を秘めている。重層性が東京に表情を与え、「バイオ的システム」が東京に欧米の都市と異なるエネルギーを供給しているのである。

東京がもっている雑多な性格は都市形成の重層性やアジア性だけではなく、「全世界の文化のパッチワーク」（コリーヌ・ブレ）に結果としてなっていること、国家レベル、都行政レベル、区行政レベルといった行政のフォーマルな計画とは別のところで一方ではビッグビジネスが、また他方ではゲリラ的なスポット仕掛け人が多様な魅力を、ある意味では雑多に産み出していることから生じているのであろう。東京は結果としていつも変化し続ける魅力ある都市となり、「ニューヨークと同様に変わり身の速い」（松井雅美）大都市になっているのである。こうしたさまざまな特徴が二重にも三重にも重なって、ある面からみればそれらはマイナスにみえ、別の角度からみればそれらは逆にプラスにみえることになっているのである。

「変わり身の速さ」はマチを変えていく仕事、プロデュースする仕事を新しい、そして若い人達にそれ自体が魅力となるビジネスにしていく。そのビジネスが東京のあちらこちらに魅力のスポットをつくり出す。そこにはメディアの力も加わり魅力をさらに増幅する。スポットは既成の名前を獲得するとすでに陳腐化したとされ、次なるスポットの誕生をひとびとが待ち望む。こうして東京の魅力はいつまでも尽きることがない。

しかし、魅力にも増して問題が多いことも事実である。それらは「トウキョウ・プロブレム」としてほとんど言い尽くされている。大都市問題としての過密化、交通問題、土地所有の仕組みに起因する地価高騰、都心部への業務機能の過度の集積による昼間人口と夜間人口との極端な格差、それらの結果としての職と住のアンバランス化の止まることのない進行、東京とそのほかの地方との間の格差の問題、その結果でもあるそれら地方とNIES諸国との間の経済競争の発生と激化などなど。アンバランスといえば経済の動き、お金の動きの面での国際的地位の向上に追い付かない文化面の遅れがあることの指摘もあった（舛添要一）し、新しい問題としての外国人労働者の流入もシンポジウムでかなり論じられた。欧米各国でみられたように、若者が敬遠しがちな業種や職域での労働力不足に対応するための外国人労働者の呼入れが現在、東京を中心に一般化しつつある。好況期には問題がなくても不況期に自国内労働力と競合し、欧米におけるように問題化しないという保障はどこにもない。東京の場合、建設業だけではなくサービス業への外国人労働者の浸透が顕著で、それはそれとして都心部に新たな状況をつくり出しつつある。

前に引いたNIRAの『世界都市東京の創造』はニューヨーク行政研究所に委託した調査の報告書であり、東京を外国の研究機関がどうとらえるか、という問いへのひとつの答えになっている。それによれば、世界都市の備えるべき基準としてまず国際金融センターであること、つぎにコスモポリタン都市であること、そしてもうひとつ、多様な近隣地区と住民のホームタウンであることがあげられている。第1の

基準は達せられた。第2はまだまだニューヨーク、ロンドンに及ばない。第3は東京の都市の形成そのものがお手上げとして来た課題で、いま東京都が「マイタウン」というスローガンでなんとか事態の改善をしたいと取り組んでいるテーマである。ニューヨーク行政研究所の報告書は「市民によるコミュニティ開発こそが、東京を日本的特色をもった世界都市にするための主要な基礎なのである」(『世界都市東京の創造』P.70)と結論づけている。「世界都市東京は、国土庁や東京都の計画立案者だけによって創られるのではない。また、有力なビジネス集団や開発企業によって創り出されるわけでもない。東京で生活し、働いている人々こそ、東京のなるべき世界都市への重要な影響力をもつのである」(同P.61)。

この指摘は「住まい」の概念の時代にようやく移ったと思われたのに、いまは「オフィス」の概念が都市の計画を押えている、という「歴史」のパートでの指摘に呼応している。問題群の基層部分に、こうした生活するひとの観点の欠如というものがあるということなのであろう。

4．未来　変貌の行方

トウキョウ・プロブレムをわれわれはいかにして解決すればいいのか、解決できるのか。一体、どの方向を目指して行けばいいのか。これは東京の変貌の方向を扱った第4セッションと最後のパネルディスカッションで議論されたことである。

一つの変貌の様態と方向はすでに顕在化しつつある。世界経済化、ボーダーレス化の進行が都市計画にも反映している。世界はヨーロッパゾーン、アメリカゾーン、それにアジアゾーンに三分割されつつあり、それらの間は通信のネットワークで結ばれ、24時間のグローバルな経済活動が実現している。それぞれのゾーンの内部ではヒエラルキー構造が形成され、1ないし2のグローバルセンターが生まれ、そこにかなりの集積がみられるようになる。グローバルセンターはつぎのような特徴を揃って備える(平本一雄)。高度の通信機能(テレポート)、人々の直接的な交流のための仕組み(国際会議場)、文化のコンプレックス、そしてウォーターフロント。これらをみると、なるほど近年、東京が実現を目指しつつあるものが揃っている。こういうグローバルセンターは、そのいずれに出掛けてみても違和感のない「世界共通仕様の環境」(平本)になるというが、それだけでは面白くない、なにか日本固有の価値をそこにつくりだせないか(月尾嘉男)という要求が出てくるのも当然だろう。その日本固有の価値とはまたテクノロジーであろうか。それともなにか別のカテゴリーの価値であろうか。いずれにしてもグローバルセンターの都市・東京には、新しいグローバル都市人が要請されることにもなるだろう(藤原まり子)。新しいライフスタイル、異質のものを許容する態度、新しいコミュニケーション・ニーズ、生涯学習へのニーズをもった都市人ということである。

このようなグローバルセンター化は必然的に東京の一層の巨大化、集中をすすめることになるのではないか。「東京の巨大化は止まるどころではなく、影響力はさらに拡大し、一極集中は一層、強化するだろう」(石井)という予想は多くのひとに共通するものである。

東京の巨大化は二つの問題に繋がる。一つは東京がそうした巨大化にどこまで耐えうるか。巨大東京は、その需要に応じられるだけの供給—例えば交通—ができるだろうか。いま一つの問題は、では東京以外の地方はどうなるのか。

前者については、広域レベルでの対応が一般的に考えられているようである(東郷尚武)。都心部分の一点集中の問題は多核多芯型の都市づくりで解決するというのが都の方策であり、現に新宿副都心の計画が進行中である。それを越えての対応は広域のレベルに依存せざるを得ないということであろう。これは東京側で考えるとなんの問題もないようにみえそうである。しかし、その「広域」といわれる地域にしてみれば、そう簡単に万歳ということにはならない。この点は今回のシンポジウムで議論できなかったが、実際に地方では問題視しているものである。東京都周辺の県・市・町村の立場でみれば、地域に住みながら東京に職を持ち東京に通勤する、例えば千葉都民が増加するということである。地域にアイデンティフィケーションを有しない住民が増加し、地域の生活様式を変えてしまうことにもなる。こうした東京エゴの問題をどう考えたらいいのか。

東京の巨大化、集中は一方で東京と地方の格差を拡大する。うまくいって「東京にセンターがあってあとは歯車として動くという仕掛け」(平本)をまたまた再現することになりかねない。しかし、この不均衡を政策的強制力で是正することには限界がある(舛添)、といいたくもなる。

ここでも過去はいろいろと教訓を与えてくれそうである。江戸の町の経済活動をGDPでみると17%程

度であったと推定されるが、これは現在の東京のGDPと同程度だそうである(平本)。つまり江戸時代においては各地方の城下町がそれぞれ活発な経済活動、文化活動を行っていたのである。そうした地方の活発な活動が衰退したのは明治以降であり、つまりは収奪の結果なのである。東京が文化の指令塔になったのは明治以降のことであることにわれわれは注目しなければならない（平本)。

ここから当然、議論は機能の一点集中をどのように解決するか、ということに移っていく。

昨年（1988年）12月に日本経済新聞が行った全国調査（全国成人男女1万人を対象。有効回収率75.8%）の結果によれば、遷都に賛成は全国で31.6%、反対は17.0%。5年前に比べると賛成が12.7%増えている（これらの調査結果については『日本経済新聞』1989年6月26日による)。反対を地方圏でみると14.9%、東京圏では25.2%と約10%高い。「首都機能の地方分散」推進に賛成は全体で22.2%、「地方への権限委譲」推進賛成は19.5%、「首都圏内での機能分散」は13.2%となっている。これが都区部になると大分様子が変わって、「首都圏内での機能分散」20.8%、「東京の改造」18.8%が上位を占めている。また、東京都の「首都機能調査研究会」（伊藤滋東大教授）が発表した報告書では、遷都も分都も、わが国の経済に重大な影響を与えるもので、「東京都の周辺の業務核都市に首都機能の一部を分散・再配置する〝展都〟が、現実性の高い選択の一つ」という考え方を打ち出している（この報告書については『東京新聞』1989年7月12日による)。

これらをみてくると、問題の解決策の選択はかなり難しいことがうかがえる。国民レベルでの合意をどのようにして形成するのか、東京都民の意識と東京以外の地方の人々のそれとのギャップをどう埋めるのか。

シンポジウムでは二つの考えが出された。一つはグローバルセンターとしての東京の力を弱めるかたちで国土の政策をとるのはまずいので、部分機能を移す分権構造でいくのが好ましい（平本）という考えである。もう一つの考えはかなりラディカルで、国際金融センターとしての機能と首都としての機能を切離し、東京はゴールデン・トライアングルの一つとして機能することにして、首都機能は純化してどこか地方に軽い首都をつくることを考えたらどうか、というものである（柿沢弘治)。

後者は、東京が日本の首都で、首都東京とその他の地域、ということで争うのは最早、時代後れであり、われわれはそこから脱却して「新しいテーゼ」に向かわなくてはならない、という考えに基づいて出されている。国を越えた存在としての都市に東京はなるべきだ、というわけである。

この考えは考え方としては魅力的である。しかし先程引いた調査結果や研究会の報告書の論旨からみて、現実味はどうも薄そうである。ただ、そうした課題に取り組んで議論をまきおこし、説得をして正統化していくのが政治家の仕事なのであろう。世論が割れている事自体、政治的なイッシューとして政治家の血を騒がせることになるに違いない。残念ながらパネルディスカッションでは、このイッシューについての議論を展開することができなかった。これだけで十分に一日かけての討議ができることだけは理解できた。いずれにしても東京の一極集中、巨大化は、グローバルセンターとしての機能の拡大に伴うものと、首都機能の高度化に伴うものとの重なりのなかで、相互に拡大、強化にむけての影響を与えあって進行しているとみてよいだろう。この巨大な渦のようなダイナミズムの処理ということに、だれが、どのように立向かうことができるのだろうか。すべてがおのおのの譲れない生活を抱えた人間に係わる問題であり、人間臭いイッシューなのである。

地方の問題についてはこの他に、東京だけで世界の30%の経済を維持することはできないので、それぞれの地域が分担して、全体として30%を実現するという一体化した考え方が必要ではないか、という見解も出された(月尾)。また、新しい生種をつくるには原生種が必要なように、地方それぞれが独自性をもち個性化することによって、日本は全体としての力を常に新たにすることが可能になる、という意見もでた（月尾)。

前にも触れたように、東京／地方の問題は、東京の立場で議論する場合と、地方の立場—これにもさまざまな立場がありうることが問題の複雑さを高めているのだが—でこれを議論する場合とでは、立脚点が異なるために見えてくる構図が異なってくる。東京だけの議論では一方的と批判されても仕方がない。

その点、大地震の発生のような大危機に備えて、「スペアキー」的な大都市を用意することが必要、という見解も出されたが（舛添)、これも「スペアキー」に目された都市の住民—行政は行政としての立場で損得を計ることだろうから別になる—はどのよ

うに思うだろうか。

東京と地方との問題の解決の方向は一口でいえば「バランスのとれた都市計画」(新谷)ということになるだろう。どういうようになればバランスがとれたことになるのだろうか。計画と住民の関係については、学問的な検討も行われ、ある程度の専門家の間の合意があるようにうかがわれるが、現実ではなかなか学者の考えるようには行っていないように、ささやかな経験からではあるが、筆者は感じている。専門家に対する素人ということではなく、事が全体性、合理・非合理未分化を特色とする生活に係わってくるとき、専門家に対する住民、あるいは生活者の信頼はとみに薄れているのが現実ではないだろうか。そうした実態を顧みると、東京／地方の問題の解決はなかなか容易なものではないと思えてくる。

過密ということについては、「新しいアジア的過密住様式の創造」(藤原)、「高密度居住様式の創造」(平本) といった考え方が提出された。これらがどのように「うさぎ小屋」と違うのか、議論の展開がなかったのは残念だが、考え方としては基調講演での「アジア的カオス」と照応している点がおもしろかった。

深刻な問題になるかもしれないということで提起された外国人労働者の流入については、いくつかの大事な指摘があった。なぜこれが問題なのか、という点については、日本的経営、日本的なコミュニケーション、治安といった「日本的な秩序のとり方」がくずれる、という意見があった(舛添)。短期的はいいとしても長期的には問題化、という考えは、好況期はいいとしても不況期には問題が深刻化するということであろう。短期的には問題だろうが、長期的には好ましい、というのは、異文化的要素の導入で、新しい文化、より強い文化が展開するのではないか、という文化の観点からの考え方とみていいだろう。いずれにしても国際化を言葉としては大歓迎しているわれわれにとって、対応の困難な具体的な課題としてこの問題が登場しつつあることを直視しなければならないところにきているのである。

東京の都市文化自体がこうして変化していくことになるならば、「ゆとり」や「うるおい」といった「モイスチャー」機能 (奥谷礼子) を確保することはますます難しいことになるのではないだろうか。

東京の問題が多種多様であり、それぞれがまた複雑な背景と文脈をもっていることが分かることと、それらの解決策が実行可能であるかどうか、ということとは全く別である。山ほどの東京論が出ていることは、そのことをよく示している。今回のシンポジウムはそのことの再確認であったかもしれないが、性急に一つの解決策に拘わることは決してとるべきではないことだけははっきりした。多分、重要ないくつかのキーワードのひとつは「多様性の確保」ということだろう。「デュアル・チャンネル」(岡並木)ということもいわれた。「多様さ」が情報化社会の本質であることも基調講演で触れられた (石井)。「いまの東京でいい」「むしろ大地震のあとの計画されたマチづくりが怖い」(コリーヌ・ブレ) という発言は、そのことを指摘していることばとして受止めておきたい。

以上は二日間の報告と議論の個人的な観点からのまとめである。客観的な会議報告では全くないことを改めて強調しておきたい。全体としてはポジティブなシンポジウムであったと思う。しかし、じっくりと思い直してみると、どこか深いところに不安、暗い予感が流れているようにも感じられた。それは多分、集まった人々、議論に直接に参加した人々のほとんどが専門家であり、なんらかのかたちで東京問題に係わっている人達であったことと関係している。東京問題は専門家だけでは片付けることのできない二十世紀の巨大な人間問題なのである。専門家が百人、二百人、いや千人集まっても具体的な解決をやってみせることのできない問題なのではないのだろうか。そうした解決の仕方ではそもそも解決不能の問題にわれわれは手を染めているのではないのか、という薄ら寒い感じもあったことを記しておきたい。